

---

# **恋愛掌編集 ~一分間のラブストーリー~**

A Q

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛掌編集～一分間のラブストーリー～

### 【著者名】

ZZード

Z0039Z

### 【あらすじ】

一千文字程度の恋愛掌編を集めてみました。シチュエーションなど様々なので、お気に入りの作品を見つけていただけないと嬉しいです。

AQ

## 1・冷蔵庫にゆずシャーベット

### 1・冷蔵庫にゆずシャーベット

冷蔵庫にはいつも、ゆずシャーベットが入っていた。甘い物が苦手な彼も、それだけは好きだった。私はバーラ、彼はほろ苦いゆず。「溶けちゃうから早く!」と手を繋いで走ったコンビニからの帰り道。宝石箱のような星空を指差して、私は「ねえ、覚えてる?」と幼い頃に食べたアイスの話をした。「その話聞いたよ」と呆れつづけた。彼は優しく相槌をうつてくれた。

小さなソファの隣は、絶対譲れない私の指定席。暑がりな彼が「くつくなよ」と言つても、私は「ヤダ」と舌を出した。「木のスプーン食べにくいのに」と我慢ばかりの私。横顔を見上げていると、すぐにアイスが滑り落ちる。キャミソールの胸元で、とろりと溶ける甘く白い滴。彼は笑いながら唇を寄せ、ペロリと舐め取ると「甘いな」と囁いた。眼鏡の奥で揺らめく瞳が、私にはなにより甘かつた。

冷蔵庫のゆずシャーベットは、あの夏から減らない。  
バニラアイスは、私の胸に落ちて張り付いたまま。

## 1・冷蔵庫にゆすシャーベット（後書き）

解説＆作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

上記作品は『1P（400字）で物語を作る』という過酷な課題にチャレンジしたものです。タイトルは、某少女漫画タイトルからインスピレーションいただきました。『宝石箱』は、昔売つてた雪印のアイスです。バニラの中にキラキラの氷……衝撃的でした。物語そのものは「文字数制限の中どれだけ“イチヤイチヤ”を盛り込めるか？」というのが目標でした。ラストの一文は、読者さまのご想像にお任せ……という形になつてしまつことをお許しください。

## 2・マグカップにキャラメルティー

白いラウンドテーブルの上に、柄も大きさも違うマグカップが二つ置かれている。チビッコの方は、最近うちにやつてきた新入り君。紅茶党の私のために、東京に住むお義姉さんがプレゼントしてくれた。表面にプリントされた、子猫が伸びをするシリエットが可愛らしい。

「なんか俺、みじめな気分……」

廊下を兼ねる狭いキッチンから、ガラスのティーポットを手にした彼が歩いてきた。情けなさ全開の口調に私はクスッと笑いつつ、テーブルの上にランチョンマットを敷き直す。一つのマグカップは、布の上にお引越し。

「みじめって、どうして？」

朝寝坊した彼の頭には、ぴょこんと寝癖が立つたまま。普段かぶつていてるクールな猫はどこへ逃げたのやら。糊の利いたスーツをして「行つて来る」と告げる紳士とはまるで別人だ。普段使いの太いフレームの眼鏡と、形の良いあごにツンツン伸びた無精ひげは……まあ、似合つてるから許すけど。

「だつて、毎日朝から晩まで働いてるのに、たまの休日にお茶の一杯も淹れてもらえないなんてさー」

力チン、ときた。

毎日美味しい手料理＆愛妻弁当まで食べておいで、お茶くらいで文句言うなんて生意気な！

ラウンドテーブルの対岸に素早くまわりこみ、彼の腰めがけて軽くタックル。ティーポットが揺れて、開いた茶葉がふわりとジャンプする。「危ないからやめるよ」とすかさず雷様の声が落ちる。

彼の弱点、わき腹へ伸ばしかけた指を慌てて引っ込めると、私は大きな背中の後ろに隠れた。ゴメンの代わりにギュッと抱きついてみる。洗いたてのTシャツからほのかに漂う花の香りが、鼻腔をくぐる。

すぐる。柔軟材を香りのやわしいものに変えたのは、正解だつたかも。

微笑んだ私の唇から、ハミングみたいな言葉が零れた。

「だつて、私が淹れるより美味しいんだもんつ。これつて“適材適所”でしょ？」

彼の口癖をまんまと盗んだ私。呆れたような溜息の裏側には、目尻にシワをいっぱい寄せたいつもの笑顔があるはず。そんな風に笑つてくれるなら、私は何でもしてあげる。カーテンの白さにも、曇り一つ無い窓ガラスにも気付いてくれないけれど、全部許してあげる。

「あと半年待つてね？ 美味しいお茶、淹れられるようになるから私の体温が移つたせいか、Tシャツの背中がじわりと汗ばんでいく。お茶が注がれるコポコポという音の後、猫背の向こうから「早く俺様の美味しい茶でも飲め」と低い声が響いてきた。はーいと返事をしつつ、少し背伸びして日焼けした襟足にキスを落とすのは、さやかなご褒美。後ろ髪が伸びてきたから、今度切つてあげよう。ベランダのミニトマトをどかして、『ミニ袋をかぶせた彼を置いて嫌がつたつて止めてあげない。

テーブルの上には、ほんのり湯気が立つキャラメルティーが一杯。

シユガーポットもティスプーンも無し。

「砂糖はダメだぞ。あとお代わりもダメ」

「うー……分かった」

私は椅子に腰掛けると、子猫のマグカップを手に取つた。キャラメルの甘い香りに満たされる、一人の部屋。もうそろそろ、引越しの準備を始めなきや。

お揃いのマグカップに戻るまで、あと半年。

この可愛いいまぐカップを、小さな手のひらが握るものも、そう遠くない未来。

## 2・マグカップにキャラメルティー（後書き）

解説＆作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

冷蔵庫にゆずシャーベットという作品を書いたときに、登場人物の背景が描き切れなかつた（あの短さなのでまあ仕方ないところも……）という反省点から生まれた作品です。ちょうどタイミング良く、イチャイチャした新婚さんキャラが居たので、使いまわしました。『拾い物』の弟夫婦です。ということは、マグカップをくれたのは拾い物主人公、半年後に生まれてくるのが……ということになります。こういうリンクの仕方を他の作品でも良くやるのですが、それは決して手抜きではありません。群像劇が好きだからです。手抜きでは（以下略）

### 3・トーストにピーナツバター

腰に巻きつけるカフエ風エプロンは可愛いけれど、上着が汚れるから料理には向かない。私はあぐいを噛み殺しながら、今日も普通のエプロンを手に取った。せっかく彼にねだって買ってもらつたのに、悲しいことに一度も出番が来ない。「用と美は相容れないもの」という彼の言葉はやはり正しかつた。

「さて、今日のメニューはどうしようかな……」

冷蔵庫に貼り付けたカロリー表とにらめっこした結果、私はアボカドとトマトを選んだ。角切りにして手作りマヨネーズをあえ、ちよっぴりのニンニクと黒胡椒をアクセントに。メインはカリカリベーコンと半熟卵。それらを大きめのセラミックプレートに盛り付ければ、彼の好きなものばかりが詰まつた完璧な一皿になる。コーヒー豆もセットしたし、あとは……。

『 ガタン！』

洗面所の引き戸が開く音が響いてきた。トーストを焼く合図だ。トースターに差し込むのは、彼が好きな『ヴィアン』のホテルブレッド。週一回バスで来店する私は、店員さんにすっかり顔を覚えられてしまった。焼き上がり前に着いてしまつと「もうちょっと待つてね」と声をかけられたり、たまに私の顔色が悪いときはお店隅で休ませてくれたりする。

そんなとき私は決まって「スミマセン」と言つていたけれど、彼に「ありがとう方が良い」と教わつてからは、それが私の口癖になつた。

「うん、今日も良い匂い

レトロなポップアップトースターから、キツネ色の耳がぴょこんと飛び出した。この子はいつもお値段以上の幸せをくれる。

何もつけなくても甘いけれど、うちではピーナツバターをつけるのが定番だ。「ピーナツ油はオレイン酸が豊富で健康に良い」から

つて。オリーブ油や椿油みたいにお肌につけても良いらしい。彼はいつも私が知らない世界を教えてくれる。

鼻歌をうたいながらバターベラを繰り、ピーナツバターをたっぷり塗り終えたとき、彼がリビングにやってきた。

「おは、よ……」

言葉が、喉に詰まつた。トーストを手のひらに乗せたまま、私の体は人形のように固まつた。

ああ今日は“あの日”なんだ。彼が良く眠れなかつた日。昨夜、私を殴り足りなかつたせい。

彼の冷たい手のひらが、トーストを持つ私の手に重ねられ……次の瞬間、私の視界は真つ暗になつた。顔全体にぬるりと生温い油の感触。口の中に甘いピーナツバターが入り込む。目にも、鼻にも。パンが、床にベシャリと落ちた。

遠ざかる足音を聞きながら、私の唇はいつもの呪文を唱えていた。

ありがとうございます。  
ありがとうございました。

感謝しなきやいけない。彼は私の顔に、肌に良いピーナツ油を塗つてくれたのだから。

### 3・トーストにペーナツバター（後書き）

解説＆作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

『DV』という社会問題に興味があり、そこに陥った女の人の生活を切り取つてみようと思いました。世間的には『ポジティブ最高』みたいな風潮がありますが、ポジティブに受け取ることが、決して良いことではないケースもある……そんなことが皮肉っぽく伝わればいいなーと。（でも、彼女は幸せなのです。だから抜け出せないといつ……）

リベンジ（アホ）作品『トーストに、何つける？』をお口直しにどうぞ。

#### 4・トースト、何つける？

腰に巻きつけるカフエプロンは可愛いけれど、上着が汚れるから料理には向かない。折り畳まれたまま出番を待ち続けるそれに「ゴメンね」と謝りながら、私は今日も普通のエプロンを手に取った。後ろ手に紐を結び、踵のないダイエットスリッパをつつかける。

「さて、今日のメニューは何にしようかなー」

思い浮かんだ『カリカリベーコン＆玉玉焼き』は、冷蔵庫にくつつけた温度計を見た瞬間あえなく消え去った。朝六時だというのに表示は三十度。どうりで汗が吹き出すわけだ。

クーラーのリモコンに手を伸ばしかけ……迷った末に引っ込んだ。賢い奥サマとしては、電気を使わずに涼しくなる方法を考えねば。

私は一度キッチンを出ると、冷水シャワーをサッと浴びて汗を流した。電気代節約の代わりに、思わぬ時間のロス。濡れ髪のままエプロンをつけてキッチンへ駆け戻り、冷蔵庫からアボカドとトマトを取り出す。夏野菜は体を冷やしてくれる優れものだ。角切りにして手作りマヨネーズをあえ、ちょっとぴりのニンニクと黒胡椒、ハーブの効いたクレイジーソルトをアクセントに。

「メインは……ちょっと手抜きしちゃお

再び冷蔵庫をのぞき込み、先週お取り寄せした『鴨とフオアグラのリエット（ペースト）』と温泉卵をチヨイス。リエットは青いレタスの葉にのせ、温泉卵はココットの容器に落とす。それらを舟形のセラミックプレートに盛り付ければ、涼しげな一皿のできあがり。残るはあと一品……。

『 ガタン！』

洗面所の引き戸が開く音が響いた。彼が起きたから、そろそろトーストを焼こう。

トースターに差し込むのは、彼が好きな厚切りのホテルブレッド。焼き上がるまでのわずかな時間で洗い物をやつつけ、アイスコーヒー

ーを用意する。

「んー、今日もいい匂いつ

私の声に応えるように、レトロなポップアップスターからキツネ色の耳がぴょこんと飛び出した。この子はいつもお値段以上の幸せをくれる。

毎日食べても飽きないのは、つけるもの次第で鮮やかに変身するから。冷蔵庫の最上段には、ティップを並べたトレーが収まっている。ベーシックなバター、口溶けの良い発酵バター、甘さ控えめなピーナッツバターに、フルーツのコンフィチュール（ジャム）が数種類。

トレーをテーブルに移すと、並んだ容器の表面がじわりと汗をかき始めた。さつきシャワーを浴びた私の体もすでに汗ばみ始め、ショートボブの毛先から肩や背中に落ちる滴が冷たい。

「そつか、こいつ暑い日こそピッタリじゃない？」

食器棚の引き出しから、お蔵入りのかつエプロンを嬉々として取り出したとき、彼がリビングにやってきた。

私は、最高の笑顔で出迎える。

「おはよっ、ダーリン！ ねえ、トーストに何つけるか決めて？ 暑くてバターが溶けちゃう」

まだパジャマ姿の彼は、私を見つめしばし絶句した後、こいつ言つた。

「暑いのは分かったから……せめて、パンツくらい履いてくれ

#### 4・トースト、何つかる?（後書き）

解説＆作者の言い訳（痛いかも?）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

ドメスティックバイオレンスオチと、このアホオチで迷つた結果、両方世に出すことになりました。このシリーズは予想外のオチはあまり用いないので、今回はドキッとしてもらえたかと思います。そう、ハダカエプロン……日常にあらうる天国（？）を提供してみたいなーと。ダーリンには、今回ソシコミをさせてみましたが、ノリボケさせても良いですねえ。しかし、その後の展開が（ピー）になつてしまつるので、なんとも……うふ。

## 5・ささやかすぎる贈り物～重なる想い～

おさげ髪を弾ませて、泣きぼくろの小柄な少女……桜子が駆けてくる。

「お待たせしました」

息を切らせ、着物の乱れを直す桜子。丸刈り頭を横に振った正一は、緊張した面持ちで「これをあなたに」と一枚の紙を差し出した。可憐な細い指が折畳まれたその紙を開く。

「まあ……」

艶やかな唇から感嘆の声が漏れた。

『願はくは 花の下にて春死なむ その如月の望月のいひ』

長い睫毛を羽のようにパタパタと動かし、右上がりな筆文字を何度も目で追うと、桜子は囁いた。

「正一さん達筆ですねえ。書道家になられたら?」

「桜子さんっ! 見るところ違いますから!」

叫んだ正一は、その勢いでゲホンと咳をした。一度の咳が呼び水となり、喉の奥がみるみる熱く腫れていく。

そんな正一の背中をさする、たおやかな手。

「ほら、大きな声を出すから。正一さんは昔から貧じや……病弱なのに」

「「ゴホッ……さく……らじ……さん」

涙目になる正一。桜子はくすくすと笑う。

正一にとつて桜子は一つ年上の幼馴染だ。守られる側の弟だった正一はいつも桜子の背を追い越し、見た目はずいぶん大人になつた。持病が正一を本の虫にした結果、今や正一は町一番の秀才。その才能を惜しむ声は、正一本人の耳にも届く程の噂になっていた。

「なのに……何故?」

桜子の独り言めいた咳きに、正一は姿勢を正した。ひゅうひゅうと鳴る喉を氣合いで止め、口をへの字に曲げて。太く凜々しい眉の間に縦ジワが入る。

「もう知っているんですね。赤紙のこと」

冷たい風が桜子の前髪を揺らし、細い肩の向こうへと流れて行く。その先には慣れ親しんだ桜の木。薄紅色の蕾は春の訪れを告げている。花開く時を待たず正一は戦地に行かなければならぬ。

いつもは青白い顔を赤く火照らせ、正一は言った。

「俺、必ず生きて戻ります。だから」

「あつ正一さん、その表情良いです！　そのまま動かないでください。」

眉間のシワが深まる正一にも頬着せず、桜子は渡された紙を鞄にしまって、新しい紙と鉛筆を取りだした。こうなつた桜子には逆らえない。大人しく制止した正一は、黙々と筆を動かす桜子の姿を胸に焼き付けた。

「……はい、完成です」

「見せてください」

「嫌ですよー」

無邪気に笑つて紙を背に隠す桜子。鬼ごっこの誘惑に乗りかけた

正一は、桜子の瞳に夕焼けの茜色を見つけた。もう時間が無い。

「桜子さん、聞いてください」

「何でしょう？」

「あの歌を詠んだ西行法師は、桜の花を愛していました。『死ぬときは桜の下で』と願うくらい……そして俺も」

桜子の丸くつぶらな瞳が、パチパチと素早く瞬きする。これは一生懸命考えている時のしぐさだ。

つまり、伝わっていない。

正一は覚悟を決め、大きく息を吸い込んだ。

「桜子さん、俺はあなたと」

「これあげますっ」

肝心なところで邪魔をされる。

肩を落としかけた正一は、手渡された紙を見てよつやく眞付いた。桜子は全て分かっているのだと。

描かれていたのは、匂い立つような満開の桜。と、太い眉にへの字口の少年。隣には泣きぼくろのあるおさげの少女。絵の中の一人は手を繋ぎ、幸せそうに微笑んでいた。

「私、言葉なんて欲しくないんです。欲しいのは……」「

静かに顔を伏せた桜子の足袋を、涙の雫が濡らした。

\*

「ひいらかな春の日差しが、レースのカーテン越しに差し込む。線香の香りが漂う和室にぴょこんと頭を覗かせたのは、つぶらな瞳を持つショートカットの少女。その背後では、色白の少年が口をへの字に結んでいる。

「今度はどんなイタズラしたの？ 姉ちゃん」

「イタズラじゃないよ、プレゼントだもん」

「昨日の“蛙”は、ばあちゃんには効果無かったみたいだけど」「うつ……」

少女はやや太めの眉の間に縦ジワを作る。「今どき珍しい物捕まえてきたねえ。ありがと咲子ちゃん。せつかくだから、コレは夕飯のおかずにしましようかね？」と、蛙の足を摘んで笑った祖母。驚く顔が見たいのに、いつも返り討ちにあつ。

「今回はちょっと違うんだから……」

祖母が出かけた隙に、弱点を探すべくこつそり和室を物色した少女は、飴色になつた桐箪笥の奥に古びた紙を見つけた。引き出しの

隙間から床に落ちてしまった、埃まみれの紙。重ね合わされた一枚には和歌が、もう一枚には大きな桜の木と大好きな祖母、去年亡くなつた優しい祖父に似た人物が描かれていた。

少女はその“ラブレター”を、祖母が昼寝に使うそばがら枕の力バーに差し込んだのだ。

帰宅した祖母は、今その枕で眠っている。

「ふーん。たまには粋なイタズラもするんだね、姉ちゃん」「たまにはつて失礼な！ てゆーかイタズラじゃないしつ！」

「ちよつ、静かに」

唇の前で人差し指を立てた少年が、不意に顔を強張らせる。少女が視線の先を追うと、そこには陽だまりの中でまどろむ祖母の横顔。まるで微笑むように穏やかな……その頬には、光る雲があった。

(夢で逢えたらいいね、おばあちゃん!)

姉弟は、そつと部屋を後にした。

## 5・ささやかすぎる贈り物～重なる想い～（後書き）

解説＆作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

電撃「」のお題『ささやかすぎる贈り物』は、珍しく自分にとててもマッチして、良い感じの話が作れました。まあ、落選したので所詮はそのレベルなのですが……。今作品では、珍しく構成を綿密に考えました。シーンは2つで、序破急。笑わせてしゅんとさせて、なごませる……なんて、上手く行ついたら良いのですが。和歌を活用するというのも一つのしかけでした。詠み人は西行法師様で、意味は「どーせ死ぬなら、大好きな桜の花の下で死にたいな」とです。死地に赴く男子にピッタリだなあと。桜と桜子をかけて告白なんてキザだけど、この時代だからこそって感じじゃないでしょうか。あと一作の中に、幾つの贈り物（幸せ）を混ぜ込めるかなーというチヤレンジも、こつそり行つてみました。絵、手紙、無事に戻つてくれたこと（もしくはそつくりさんと結婚……？）この辺も読者様のご想像におまかせ）、その後の幸せな家庭、最後に孫たちが見

#かみうといつくれた夢……と、蝶も流れます

## 6・初恋

ゆらりゅらと、 笠舟が流れていく。

降り注ぐ日差しを跳ね返し、 さざめくたびに色を変える水面。 黄緑色の小船が、 そよ吹く風に煽られ小川をゆっくりと下る。 頼りなげなその様を見て、 優は目を細めた。 水に沈むまいと抗う健気さで、 心がとらわれる。

「ユウ、 あんまり乗り出すと川さ落ちつぞ」

「大丈夫だよ」

優は隣を歩く少年 恵司ケイジに笑いかけた。

梅雨の晴れ間の太陽は、 雲に隠され続けたうつ憤をはらすかのように、 強烈な熱をまき散らす。 およそ運動とは縁のない恵司は、 川べりの道を十分ほど歩いただけですっかり汗だくだ。 皆が半袖の体操着で通学する中、 恵司は長袖のワイシャツにネクタイという校則通りのいでたち。 第一ボタンまできつちり止めたシャツに、 恵司の性格が表れている。

……全く、 見ているこっちが暑苦しい。

優は涼しげに波打つ川面に視線を戻すと、 無邪気に微笑んでみせた。

「でもさ、 入つたらきっと気持ちいいよ？」

「バカだなあ、 こんなどぶ川ば入つて、 気持ちいいわけねえべや」 吐き捨てるように告げる恵司。 優は心の中で「うちの近くの川はもつと黒くて臭い、 本物のどぶだつたよ」と囁いた。

優の胸に蘇る、 生まれ育つた街。 灰色のアスファルト、 生温いビル風、 車の排気ガス。

今視界に映るのは、 見渡す限りの緑だ。

優がこの町へ移り住んで、 早一ヶ月。 前の街と比べては「全然違う」と驚嘆の声をあげていた優は、 気付かなかつた。 素直過ぎるその言葉が、 周囲を傷つけていたことを。

中三の夏。季節外れの転校生に、憧憬の眼差しを向けていたクラスメイトは、数日で態度を一変させた。優を『都会モン』と呼び、仲間の輪から締め出した。優は無口で大人しい生徒として、再出發せざるをえなかつた。

完全な孤独ではないことが、不幸中の幸い。先に皆の輪からはみ出していた生徒が、優を受け入れてくれた。それが恵司だつた。

『 その本、俺も読んだ。面白れえべ』

休み時間を無言で過ごすようになり、三田日の朝。寂しさに耐えかねた優は、逃げ場を求めて一冊の文庫本を開いた。父の本棚から適当に抜いたその本は、あつという間に優を別世界へと連れ去つた。だから優は、突然耳元で響いた低い声に、心底驚いたのだ。

そして、戸惑つたのは優だけではなかつた。優を遠巻きに眺めていた生徒たちが、一斉にざわついた。その反応を見た彼は「何でもねえ」と咳き、すぐさま優から離れていつた。

彼がいわゆる？村八分？扱いの男子ということは、優も知つていた。でもそのときの優にとって、小柄でやせっぽちで平凡な顔立ちの少年が、救いの神に見えた。

放課後、優が下駄箱を開けると、折り畳んだルーズリーフがあつた。『 本の話がしたい。伊瀬川の中橋の下で待つて』 優は差出人を思い浮かべ、一人笑みを漏らした。皆の悪意が優に飛び火しないように……そんな気遣いに胸が熱くなつた。

川沿いの土手を下ると、群生する隈笹の陰に文庫本を手にした恵司がいた。教室とはうつて変わり、優に屈託ない笑みを向けてくる。優も笑顔で手を振つた。たいした自己紹介もせず、そのまま読書談義に興じた。恵司の放つ言葉は、どこか都会の匂いがした。

この町は素朴過ぎる。優や恵司などの？頭でつかち？な子どもは、それだけで周囲から浮いてしまうのだ……優はそう結論付けた。

それから優は、恵司との距離を少しずつ縮めていつた。ただ恵司は『学校では俺に近づくな』と優に強く命じた。

時折恵司は大柄な男子に取り囲まれ、罵声を浴びせられていた。

優にできるのは、唇を噛み目を伏せることだけ。空しかば、恵司と川べりを歩く時間で埋めた。

恵司は、初めて声をかけてきたときから優にやさしく。今もそうだ。ほんやりと 笠舟を追う優が砂利に躡ぐのを見るや、太めの眉をくつと寄せ、ぶつきらぼうに言い放つ。

「この川、浅そうに見えつけど、場所によつては意外と深えんだ。水も冷やつこいしな」

「ふーん?」

「油断すつと、本当に落ちて風邪ひくぞ」

優を気遣う台詞とそぐわない、川面をねめつける鋭い眼差し。優はその意味を悟った。

恵司は、この川に落ちたことがあるのだらう。いや、落とされたのかもしれない……。

「そつか、じやあ諦めよつと」

哀しみを胸に秘め、優は明るい声をあげた。

キラキラ、光る水面。

ここに飛び込むことができないのなら

優はくるり、と身体を反転させた。お下げ髪が肩先で弾み、膝丈のスカートが翻る。

恵司の正面に立ち、眩い太陽を背に、笑う。

「ケイ、夏休みになつたら、海に行こうよ!」

手の平を差し出す優。恵司は優の瞳をまじまじと見つめ……そつと、その手を握った。

## 6・初恋（後書き）

解説＆作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

去年のフェリシモ落選作です。一年寝かせて公開……読み直したんだケド、これはこれでいいような気がしたので、改稿せずそのままです。この作品ですが、テーマそのものを『三分間のボイイミーツガール』に転用（男子視点のラノベに加工）してみました。それくらい好きなネタです。イジメとかリアルにぶち当たると重苦しいものですが、それに屈しないことが幸福への一歩という気がして。救いはどこにあるんだよ、というあたりも大事なメッセージですね。（……と、たまにはまじめなことも言つてみる。）\*

\*（△

## 7・レイニー・ディー～雨音に魔法をかけて～

「雨が降ればいいのに」

窓の外は、今にも泣き出しそうな曇り空。俺は湿っぽい机に頬杖をつき、溜息混じりに呟く。

願いを聞きつけたのは、神様でも雷様でもなく……隣の席の愛だつた。

「一君、雨が好きなの？」

やや太めな眉の下、つぶらな瞳を真ん丸にして不思議そうに小首を傾げる。その表情は同じ年に見えないほどあどけない。ショートの黒髪がサラリと流れ、天使の輪がキラキラ輝く。

（つまおおおおちくしょお可愛いゼッ！）

なんて心の叫びは一瞬も漏らさず、俺は冷淡に言い放った。

「や、別に」

これは行き過ぎた照れ隠し。こんな態度だから、高校に入学して一ヶ月も経つとこのになかなか友達ができない。女子に話し掛けられることなど皆無だ。

この、天然純感キヤラの愛以外には。

「あ、何か隠してるー。ね、教えて？ お礼するから」

「……次の体育、マラソンでダルイってだけ」

「へえ、一君が愚痴つてるの初めて見たよ。ちょっと新鮮！」

愛は瞳のキラキラ指数を上げ、小柄な身体をズイッと寄せてくる。ヤバイ。これ以上近寄るな。イイ匂い過ぎて鼻血吹ぐ。

「じゃ俺そろそろ行

「待つて、お礼がまだ

「別にいいって」

「まあ聞いてよ、実は私魔法使いなんだ。今から一君の願いを叶えてあげるー。ね、目瞑つて三秒数えて？」

ざわつく教室の片隅、俺は動悸息切れを必死で抑えつつ目を閉じ

た。と、耳をくすぐる愛の囁き声。

「さん、に、いち」

コシン、コン、コン。

「……へ？」

俺のつむじにぶつかり、机の上で一回バウンスしたそれは。  
「えへつ。『飴が降りました』……なんて」

（うああああ可愛いくていうかもうー）

「ばあか」

俺は苦笑と共に立ち上がり、馳洒落魔法使いの頭を軽く小突いた。  
愛がむうつと唇を尖らせるから、仕方なく飴玉を口に放り込む。  
キューんと甘酸っぱいレモン味。包み紙のイエローがどこか懐かし

い。

「あ、美味しい

「でしょ、私のお気に入りなんだッ」

パアツと明るい笑顔に戻る愛。

甘い物は苦手だけど……まあ、これなら悪くない。

「うわ、今更かよ……」

昇降口を出ようとした途端、待ち望んだ雨。激しく叩き付ける雨  
脚に顔をしかめ、行くしかないかと折り畳み傘を取り出しかけたと  
き。

視界の端に、キラキラ輝く天使の輪が映った。

「一君ツー」

セーラーのリボンを弾ませて、愛が駆けてきた。「委員会の仕事  
長引いちゃつて」と軽やかな声が届くも、右から左へツツーと抜け  
ていく。

（これは俗に言う『相合傘』「フラグッ！」いや待て落ち着け俺、残  
念ながら愛の家とは方向が真逆。「送るよ」つてのもさすがに不自  
然だ……）

「あ、もしかして一君も傘無いの？ 私もなんだ。困ったねえ」

そわそわする俺を見て勘違いした愛が、目尻をふにゃんと下げて笑う。今更「傘あるし」とは言い出せない。かといって相合傘は難しく、「この傘を貸すと言つても遠慮するに決まつてゐる……だつたら」

「あのや、愛」

「うん？」

「田暝つて十秒……いや、三十秒数えてくれ」

「えつ、一君も魔法使うの？」

俺が神妙な面持ちで頷くと、愛は恐る恐るとこうよつて経験を下ろした。

その瞬間、愛の世界は雨音だけになる。そして律儀な愛が「さんじゅう」と呟いたとき、俺の姿は消えているのだ。

足元に、一本の傘を残して。

「うー……だりい、母さん水……」

「傘失くすなんてバカねえ。次は柄のところにでつかく名前書いくときなさい。』『……」

「それただの線にしか見えねーし……」

母さんが「もつと変な名前つけりや良かつた」と微妙な文句を垂れつつ部屋を出ていく。俺は苦い薬を飲み下しひどくダイブした。

「うう、無様だ……」

あんな気障なことをしておいて、翌日風邪で寝込むとは。恥ずかしくともつ愛に合わせる顔が無い……でも、やっぱり会いたい……。止むことのない雨音。心地良いまどろみに落ちる俺に、神様はさやかなご褒美をくれた。

セピアな夢の中に現れたのは、制服姿の愛。

トレードマークの笑顔は消え、捨て犬みたいな目で俺を覗き込む。

『一君、昨日は魔法の傘ありがとね。だけど……』

ああ、ゴメン。そんな顔させたかつたわけじゃないんだ。

『だつて、私のせいだ』

いひつて。俺にとつては、愛が濡れない方が大事だつたからさ。

田を真ん丸にした愛が「本当?」と尋ねる。俺は「本当だよ」と素直に答える。教室では言えない言葉たちが、静かな雨音に溶けていく。

『……ありがと。お礼に魔法かけてあげるね。風邪なんてすぐ治っちゃう、特別な魔法だよ』

聴き慣れた「さん、に、いち」の囁き声。チャリットという包み紙の音。仄かなシャンプーの香り。

そして俺の唇にそっと触れた、レモンの甘み。

『一君、大好きだよ……早く良くなつてね』

翌日、すっかり熱が引いた俺が学校へ行くと、なぜか愛は居なかつた。

愛の友人曰く、誰かに風邪を移された、らしい。

俺は「バカだなあ」と苦笑し……夕立の中、家とは逆方向に歩きだした。

口にレモン飴を放り込み、いつの間にか戻ってきた『魔法の傘』を広げて。

## 7・レイニー・デイ　～雨音に魔法をかけて～（後書き）

解説＆作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

電撃しし『レイニー・デイ』投稿作。電撃的には少々大人しい話ですが、個人的にはお気に入りの一作になりました。初稿バージョンからあちこち変えたのですが、某評価サイトにて「ちゅーは□にするべき」とのご意見を聞く前は「ちゅーはほつべだつべ！」と思つてました。飴もシユワシユワサイダーです。やはり初めてのキッスはいつの時代もレモン味なのかねえ……（遠い目）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0039z/>

---

恋愛掌編集 ~一分間のラブストーリー~

2011年11月30日13時54分発行